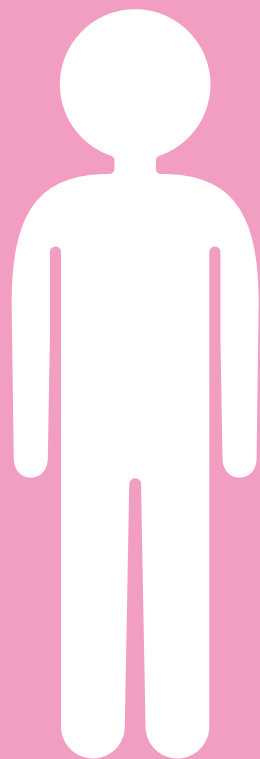


異国をまとう



世界各地の儀礼や芸能のなかには、異邦人を装う人物がしばしば登場したりする。観客に笑いやエキゾチシズム(異国への憧憬)の感情をもたらす一方で、近年では差別として批判されることもある。本特集では、「異国をまとう」ことの現在と将来について考えていきたい。

異国装考



丹羽 典生 にわのりお
民博 超域フィールド科学研究部

いわゆる仮装、ことに異国の人びとの格好をするという行為に関心を引かれた背景には、筆者が近年調査している日本の大学応援団文化がある。関係する資料を探索している折に、古くから続く学生文化

じつは今でも、旧制中学まで起源がさかのぼれるような歴史をもつ一部の学校に残されていたりするところもある。



掲載写真はすべて学園祭における「土人」踊りのひとこま
(関西大学年史編集室所蔵)



の在り方に目を引かれた。そのひとつが、仮装である。いろいろな資料から、お花見などの日本のお祭りの折々はもとより学園祭や寮祭などの学生が主催するイベントにおいても、仮装が非常に盛んであった節がうかがえる。東京大学駒場祭における水泳部の河童踊りなどは、そうした過去の名残だろうか。そして多種多様な仮装のなかには、歴史的人物や想像上の生き物などにまじって異国の人びとに関する他者表象が多分に含まれているのだ。

異なるものへの関心

例えば、「土人」踊り。土人には野蛮人という差別的な含意があるため、今日留保なしで使うことには一定の批判を招くであろう。ところがまさにその土人の格好をまねるイベントが過去には存在してい

差別表象への転換と日本特殊論を超えて

しかしこうした異文化表象は、ある時代から評判がよくないのも事実である。先の大学の例では、学生運動の時代に転換点があると聞いている。このあたりから学生の雰囲気が変わると様変わりして、「土人」踊りの伝統も途絶えているという。復活させようかという話が出なくもないが、別の名称を提案することから始めなければならず、道りは遠いようだ。

近年まで続いている例でも、同様な困難に直面している。そもそも教育の現場でこうした催しが必要とされるかどうか議論の対象となるし、伝統の名のもとにさしあたり継続されていても、「土人踊り」という名称は変更され、女子学生も参加できるような内容とされていたりする。

ところでこうした異文化や他者表象を含んだ催しとそれらの時代的な変化は、少し海外にまで視野を広げてみると、日本に特殊なものではないことがわかる。最近の例では、昨年末、アメリカの大リーグでも新人いじりの儀式(ルーキーヘイジング)が禁止された。この通過儀礼の一種では、新人野球選手に女装や奇矯な格好をさせることになっていたが、やはり差別の問題などで時代にそぐわなくなってきた。

さらに時代をさかのぼればアメリカンフットボールのマスコットなどでアメリカ先住民の戯画化された形象が使用されていたことや、黒人イメージが娯楽のなかで転用される minstrel show などだが、こうした例の先鞭となるうか。思うに異文

たのである。おそらく旧制高校などの祭りにおいて集客力ある催しとして構想されたのが起源のひとつであると思われる。

ここでイメージされている「土人」が、世界の地理上のどこかに存在している具体的な地域の人びとの姿なのか、あくまで想像上の形象なのかは判然としない。一方で「土人」の姿かたちには共通点が多くみられる。顔を含めて全身墨で黒く塗りたくり、藁で作られた腰巻を纏う。武器として槍や盾を掲げて練り歩いたり、踊りを披露したりするのがよく見受けられるパターンである。

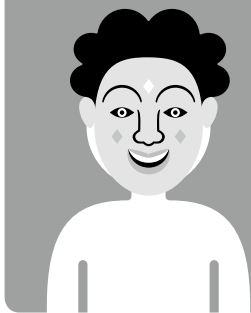
ある大学予科の学園祭の例では、近所の子どもを含めてお客さんに喜ばれること、墨や藁などお金がかからず準備できることなどから催しのひとつとして好まれていたらしいことがわかっていく。そして



化を装う行為が世界各地にみられるのは、他なる者に対する憧憬と侮蔑というオリエンタリズムとよばれる異文化表象の根源にふれているからではないだろうか。本特集を通じて、そうした怪しげな魅力を放つ異文化を装う儀礼のあれこれについて、みていきたい。

「白い人」

佐々木 重洋 名古屋大学大学院教授



ノートとペンを手に調査する「白人」

ナイジェリアのイボ人の仮面儀礼に登場するオニエオチャ、文字どおり「白人」をご存じだろうか。一九八二年に撮影されたこのオニエオチャは、ノートとペンを手にしており、あたりを歩き回ってはノートに何かを記入するしぐさをするという。その姿を見ると一目瞭然だが、これは旧宗主国であった英国の植民地行政官か、彼に同行する研究者のパロディーである。わたしも、イボ・ランドからほど近い旧英領カメルーンやナイジェリア南東部で、「ジヨタ」というピジン英語（現地化された英語）をよく耳にした。ジヨタとはメモ書きのジヨッター、さらにはメモとり (shote) のことである。一九九三年の滞在初期、まだわたしの個人名が現地で浸透していなかったころ、わたしは「白人」のほか、ときにジヨタとか、ミスター・ビック (B-C社のポールペンに由来し、ペン一般を指す) などと呼ばれることもあった。理由を尋ねると、「白人はペンをもつものだから」ということだった。確かに、わたしもまたフィールドノートとペンを持ち、人びとに話を聞いているジヨタを繰り返している。なるほど、イボのオニエオチャではないが、「白人」そのものである (サファリヘルメットは被らないが)。それにしても、一九九〇年ごろ、「白人」のステレオタイプのひとつとしてノートとペン、そしてフィールドワーク (?) が連想されていたという点は、

白色は、彼らから見ればもつとも異質で、自分たちとは対照的な、場合によっては非人間的とすらいえる対象に付随する属性といえる。実際、例えばエジャガム人にとって「白人」とは西欧人のことだけではなく、日本人、インド人、中東や北アフリカの人もみな「白人」である。そこで共通しているのは、それがいずれも「黒アフリカ人ではない」ということのみである。自分たちとは異質の連中、それが「白人」なのだ。そして、異質で非人間的なものは、計り知れない力や異界とも結びつけられやすい。白は、アフリカの多くの人びとにとって異界、非日常性、非人間、あるいは超人的力にかかわる色なのである。

「白人」とジヨタの関係は、こうした文脈でも説明できる。おそらく、圧倒的な優越者として当時のアフリカの人たちの前にあらわれた「白人」は、植民地行政官とその仲間たちだったが、同時に、(植民地政府や本国へ報告するために) ジヨタ



【写真2】 エクバ結社が、頭飾り状の「葉」であるンジョム・エクバとともに、村落における多産と豊饒を祈願して練り歩く。ンジョム・エクバには「白人」の女性像が記(まつ)られている(エジャガム)

を繰り返す彼らの姿は、じつに奇異で不可解なものに映ったことだろう。そしてこのジヨタが、異質な「白人」の異質な行動の典型のひとつと解釈され、やがてパロディー化されていったのではないか。もちろん、今やペンもノートも「白人」の占有物ではない。しかし、アフリカでフィールドワークをおこなっているのは、やはり今も「白人」が圧倒的に多いのだ。

この地域の人びとの歴史的経験と照らし合わせてみても興味深い。美しさと力、多産性

アフリカの多くの地域で、「白いこと」や「色が」明るいこと」は好ましいとされる。肌の色が明るい女性は、男性に人気がある。わたしの友人の女性たちも、肌を少しでも白くするのだといって、クリームや何やら怪しげな液体をよく皮膚にすり込んでいた。わたしが滞在していたのはカメルーン側のエジャガム人の集落であったが、ナイジェリアから来るエジャガムやイボの女性もそれは同様だった。エジャガムを含めて、エフィク、イビビオ、イボなどのギニア湾沿い——ナイジェリアから西カメルーンにかけて——の諸民族のあいだでは、黒白、美醜などの対照的な一対の仮面を用いた踊りが伝承されている。興味深いのは、その白く美しい方の仮面の造形と彩色だ。いずれも、白っぽい肌色や黄土色をしており、アジアチックな造形、具体的にはインドの女神のような容貌をしているものもある



【写真1】 「女仮面」(エジャガム)

「写真1」。また、このあたりには、マミ・ワタと称する女神の祭祀も存在するが、こちらも「白人」の姿である。エジャガム人にもエクバと称する女性の結社があり、多産性や豊饒性を司るとされているが、この結社の力にも、やはり「白人」の女性がかかわっている「写真2」。

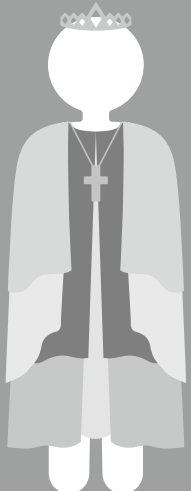
異質性、非人間性と白

ただし、アフリカにおいて、白いことは好ましいとばかりはいえない。

黒い聖母は誰のものか

——ヨーロッパ・キリスト教の裏表

新免 光比呂 民博 超域フィールド科学研究部



ヨーロッパには数百の黒い聖母像あるいは聖母子像が存在する。もちろん黒いといっても焦げ茶色であったり、くすんでいるだけであったりする場合も多い。だが、「黒いアテナ」などというギリシャのアテナ女神がアフリカ系の黒人であったかのような連想を導く刺激的なことばもある。ちなみに「黒いアテナ」というのは、歴史学者パナールが古代ギリシャ文化の成立に関してエジプトやフェニキアなど東方の影響を重視したモデルを主張し、あわせて近代ヨーロッパで人種主義とロマン主義が台頭し、進歩主義とむすびつくことでアリア人優位の世界観が古代ギリシャを専有化したと糾弾した議論である。

黒い聖女像

ところで、ヨーロッパの白人社会のなかに黒い聖像が見られる一例として、フランス南部サント・マリー・ド・ラ・メールの黒い聖女サラ (サラ・カリ) がある。教会の地下室にはロマ (ジプシー) の守護聖人とされた黒いサラ像が祀られ、毎年、多くの巡礼者を集めている。伝説では紀元四〇年ごろ、ユダヤ人の手によってイスラエルの地を追われたマグダラのマリ



利永琉球人傘踊 (2004年10月)

各地の琉球人踊
これらは呼称もさまざまであるが踊の内容もさまざまである。鹿児島県指宿市の利永琉球人傘踊では、紺の着物に色鮮やかな鉢巻ぎと帯を着け、唐傘、扇、太鼓や鉦をもった踊り手が「かれよし」などの歌に合わせて踊る。現在は小学生が踊っているが、かつては「ニセー」(若者)が踊り、男性は女物の着物を着るなどして派手に着飾り、踊り手が



川尻琉球人踊 (2000年4月)

衆目を集めたという。この踊は、江戸時代に鹿児島を訪れた琉球使節の様子を表現したものとされる。
同県霧島市の川尻琉球人踊では、冠に口髭に紺の琉装の「親方」、琉球鬘に紺の琉装で裾を絡げた「従者」、踊り手を女性たちが務め、三味線、鉦太鼓の囃子と歌に合わせて「やんばる」「大和人」などの曲目を踊る。踊り手は、かつては自分の髪を伸ばして琉球鬘を結った。着物も、このあたりの家はどこでも琉球紺をもっていたので、それを着て踊ったという。この踊は、川尻の近くに漂着した琉球の人びとから習った、あるいは琉球使節が浜に着いて島津公のもとに向かう途中で踊った踊を真似たものといわれている。
種子島の西之表市のヨンシー踊は「願成就」とよばれる秋祭りで踊られる「大踊」のひとつである。青年男子三、四〇人の踊り手に、赤ら顔の仮面を着けて琉球の大工や山師に扮した役が加わり、首里の王城の資材伐り出しの際に歌ったとされる「国頭サバクイ」風の歌詞が入った歌に合わせて踊る。かつて地元の人びとが船乗りとして「琉球旅」に出た際に、沖縄で覚えてきた踊といわれている。

「琉球人」を演じる人びと

笹原 亮二 民博 学術資源研究開発センター

鹿児島県の九州側と宮崎県南部、種子島には、沖縄の人びとに習ったり、沖縄の人びとの姿を真似たりしたとされる芸能が伝来する。それらは「琉球人踊」とよばれるほか、場所によっては「琉球人傘踊」「ヤンセ踊」「ヨンシー踊」「唐人踊」などともよばれる。各地の祭りや道路の開通などの祝い事の際に踊られ、その数は三〇力以上に上る。

ア、マリア・サロメ、マリア・ヤコベなど聖女たちと小船に乗って、奇跡的にカマルグ地方のサント・マリーにたどり着いたとされる。海の二聖女マリアとよばれるサロメ、ヤコベと付添いのサラがこの地に残り、他は旅立ったと伝承は語るが、サラはもともとから住んでいたという伝承もあるらしい。毎年五月二四日前後、十月二二日前後に催される祭りには多くのロマが集まる。聖女サラの像が教会から海まで運ばれるのであるが、本来的には海の二聖女マリアの祭りであって、五月二四日と二五日はヤコベの祭り、十月二二日はサロメの祭りといわれる。しかし、どうみてもサラのほうがメインであって、二四日には、地下室のサラの像にローソクをささげ、病人の痛みをやわらげるというインドの習慣にしたがって、持参した外套や肩布をサラの像に着せる。午後には、礼拝堂の天井裏からサラの聖遺物箱がおろされ、参拝者たちは先を争って箱に触れようとする。そして、サラの像が海まで担ぎ出され、司教による祈りと聖水による清めがおこなわれると再び教会にもどされる。二五日には、カトリックの祭礼として二人の聖女マリアの像がサラと同じように海水のなかまで担ぎ込まれる。このサント・マリー・ド・ラ・メールへの巡礼は、ロマが移動する名目をたてるにはうってつけで、教会側もまた布教を目的として黒いサラを聖女として祀ることを認めたという。ただし、聖女サラはカトリック教会で列聖されているわけではない。



上：南フランスの青空のもとで聖女サラ像をかいて海へ向かう人びと
下：ふたりのマリア聖女像が教会から出てきたところである
(いずれも本館ビデオテープ「7179 黒い聖女サラ信仰の巡礼——南仏サント・マリー・ド・ラ・メール」より。撮影者・本館名誉教授 大森康宏)

黒い聖女サラはロマによる崇拜対象であるから、ヨーロッパ人(白人)には関係がないともいえる。だが、「黒い」表象をもつ聖母像、聖母子像はヨーロッパに数多く存在している。最初に述べたように、その「黒さ」は単にくすんでいだけなのかもしれないが、異人としての表象が含まれているともいえるだろう。そもそも聖母マリア崇拝が地中海の地母神崇拝と密接な関係にあることは、つとに知られている。黒い聖母像には古代ガリアの母神像が影響しているとの説もあるが、聖母マリアの表象のなかに他者性としての「黒色」が含まれていることは、キリスト教を「白色化(ヨーロッパ化)」しようとしたヨーロッパ人が抑圧しきれなかった要素がヨーロッパ・キリスト教に残っていることを示しているようにも思われる。

琉球人踊と歴史

これら三力所以外の踊も含めて、各地の踊はいずれも沖縄や沖縄の人びとのかかりを由来として伝えているものの、実際の沖縄の踊との類似はほとんど感じられない。また、奇矯で滑稽な動作の演技、仮面や衣装や化粧による異相・異形の扮装、踊り手が意味を解さない詞章が混じるかけ声や歌詞といった、沖縄の人びとが自分たちとはさまざまな面で異質であることを強調するかのよう演出が施されていることも共通する。

それに加えて、こうした踊が熊本県と宮崎県中部以北、奄美大島以南の奄美群島では見られず、旧薩摩藩領に分布が限られることを併せて考えると、これらの踊の伝来が、薩摩藩が慶長一四（一六〇九）年の琉球侵攻によって琉球支配を確立し、琉球から鹿児島に進貢船や使節が頻繁にやって来るようになったという、この地域が経てきた歴史と無関係ではないことを予想させる。更に、奄美大島



ヨンシー踊（2003年10月）

以南の各地の芸能に、丸に十の字の島津氏の紋をつけたそれほど奇矯でも滑稽でもない武士や役人がしばしば登場することも視野に収めると、この地域の薩摩藩と琉球の支配・被支配の歴史のなかで、双方の人びとが相手側の人びとに対して抱いた必ずしも対等とはいえない認識が、それぞれの芸能に刻印されているようにも思えてくるが、うがち過ぎであろうか。

ジャガーを象った石彫や、金製首飾りの墓などが毎年のように出土し、今では考古学関係者ばかりでなく、一般にもその名は知られるようになった。わたしたちは遺跡見学会や出土遺物の展覧会などとおして、村人に調査・研究内容を説明し、また作業員の選出や給与についても村会議に託すなど、村との共同作業を心がけてきた。このことが功を奏してか、五年ほど前に遺跡保護団体が自主的に結成されている。



「パコパンパの貴婦人」を担ぐ高校生たち（2015年）

日本人考古学者に 仮装

関雄二 民博 人類文明誌研究部



南米ペルーの山岳地帯では、乾季にあたる六月から一〇月にかけて祭りが集中する。一六世紀半ばのスペインによる征服以降、強制されながらも浸透していったカトリックの守護聖人を戴く祭りが多い。とはいえ、酒や食べ物、音楽や踊りに興じる人びとの姿は、キリスト教とはいえないアンデスのなものを感じさせる。村内を巡回する聖人像の行列にも、風変わりな人びとが加わることが多い。頭に鳥の羽根飾りを、足首にはガラガラを巻き付け、手に鞭をもつて飛び跳ねる。どう見ても異邦人である。アンデス山脈の東側に広がるアマゾン地帯からの来訪者で、北高地ではチュンチヨスとよばれる。日本の村祭りでも外来の来訪者が人びとを言祝ぐといわれるが、それに似ている。

わたしたちの発掘調査

わたしたちが二三十年以上も発掘をおこなってきたペルー北部高地パコパンパ遺跡の麓に、調査期間中滞在する同名の村がある。村祭りではチュンチヨスこそ登場しないが、外来者が重要な役割を果たす。遺跡は紀元前一二〇〇年ごろから紀元前五〇〇年ごろにあたる大神殿で、東京ドームひとつ分くらいの大きさを誇る。二〇〇九年に、金製の耳飾りを副葬した女性指導者の墓を発見し、「パコパンパの貴婦人の墓」と名付けた。その後も



「関雄二先生」と書かれた襟をかける幼稚園児（2015年）

仮装行列に登場する「わたし」

そんな村人の意識は、村祭りにもあらわれ始めた。祭りを仕切る委員会が発案で、二年前から仮装行列が祭りの出し物に加わったのである。幼稚園児や小中学生が、さまざまな人物に仮装する。村の守護聖人である聖女サンタ・ロサやイエス・キリストが登場するのは普通だとしても、「文化遺産の村パコパンパ」と書かれたブラカードをもつ母親の後から、遺跡で発見された「パコパンパの貴婦人」姿をした女兒が登場したのには驚いた。それだけではない。パナマ帽をかぶり、手に杖をもった、かわいらしい男児の肩にかけられた襟には「YUJUI ZEKI (ユキセキ)」の文字が見えるではないか。綴りの間違いはともかく、調査中のわたしの姿にはちがいない。しかも調査に加わる日本の女性考古学者の仮装も続く。小中学生の行列はもっと豪華であった。採集狩猟民から始まり、「パコパンパの貴婦人」、インカ王、植民地時代を象徴するイエス・キリストや聖人、村にはじめて布教に来た宣教師、そして再び「わたし」が登場したのである。

わたしたちの存在や調査の成果は、人びとの歴史意識のなかに位置づけられ、アイデンティティのよりどころとなりつつあるようだ。文化遺産の保護や活用にはかり気をとられていたせいか、地元の人びとが自らの手で歴史や文化遺産への関心を高めていたことに自分でも気づいていなかった。仮装されるのも悪くないものだ。